

弘化雜記

信陽地震

十三止

内閣文庫	
番號	和 31730
冊數	13 (13)
函號	150 156

一五〇函	二三架	三一七〇號	一三冊	和書類
(三十册)				





丁未三月廿日 信州松代よりある長〜ミ〜教

さく〜流 ちりゆく流を 作るゆかり 四の目かんの

か〜〜かき せんを教とて 志あぬなる 若き〜を

か〜〜たち あつまひきた かくらんと 先〜ちねの

養ふ流を 流け〜りば 日向をき 志〜き〜り

犀川や ぶられし書を ちきりあす 舟人あ〜く

の〜れを をき被を けらちけく ことろ〜せぬ

ね代よ ぶれ〜る 人あれと えり〜さんと

その〜り 中〜求めて 鳥羽の ねの〜自由と

引あらし ねすあつめの ことばをき 家〜ふ〜け

ねあれ ぶ〜かきあの さげふあ 老たり人乃

よ〜あ ことめ〜あハ 家のそこ ちあはの下に

かきつれ けつつては かに志すま 枕をかきつ
志せるは あり瓦の ともちりて ゆきへの人乃
きんをいふ けつつたけき ますし書も ようほひまふ
そまかこい せんまきまき おのまきま 家乃念体
おひめり おのれまきん ねまきんを 心をとめて
人く乃 ぶけくまきめ ままらふ たまけてたを
求めいて 香まきまに ままらふ かの山へ
足てあはれ ぼのほのまき られふあい あつ孫の
西へおち 肩やく地まき てしこと 片付たくま
ぬり地震い かにれまき 大あま乃 あまきけちを
ゆるまき されまかの くらまき 短きしひ
あつあつ ち地の甲や 瓦まきた きのまきを

ほけて又 かにまきまき せんせんと 男らみま
くまきまき あまきまき くらまき えてまき
摩川乃 みる山乃 山まき 氷まき
まのまき ねまきまき うまきの あまに泥ま
まにいと 中まきまき あままき かまきたま
何まきまき かまきたま ぬりまき ままらふ
いふまき みるまき いままき 人乃らま
ままき 藤のれまき 未いり ありま
まのまき くのまき ねまき ありま
雨とまき 風まき 一日まき 二日にま
くまき 音候たまき 地震まき くらまき
ままき けつつたまき 地まき 積まき

まじらたま いふゆふと まけくとも 又そらふふ
大水乃 ころるとして 園ふのあり 山ふのり
人りくと せむしくに さいりやん くらよのち
きれもさふん

かゝ

いふふたよのまゝいふふたよのまゝいふふたよのまゝ
よふふかゝるまゝいふふたよのまゝいふふたよのまゝ

此後東廬山と凌雲院と信託松代祿出と由承

這長秋及秋之信州善光寺新醫家ヨリ出之僧
意雲坊惜海法師、祿あつた

お凡后誌

仁化業年三月廿四日夜五更付以信濃國大地表と云
光寺後内平外新田所の後町大門町西可權堂町
岩石橋小路西町町末の左表は田一町と不結續
りん左地震を而く大業年申末大火に成燒失人
馬怪劫人夥爰も吾光寺本堂斗納り大友人
屋敷石橋の邊又と燒失吾光寺の邊に村小柴見
村之久保町町小市村邊の場田石山崩ると川中丸
幅百間福と而七を通り知りしん不く大地割け
田と村末を地上一階と二と人位も出たおんく
小本とをた後方と河土中にお成志田信徳と堀
下町と馬寄町と荒柴田八九所種と不取敷而
甲申朝崩九人敷と六千人申り情死骸不知能